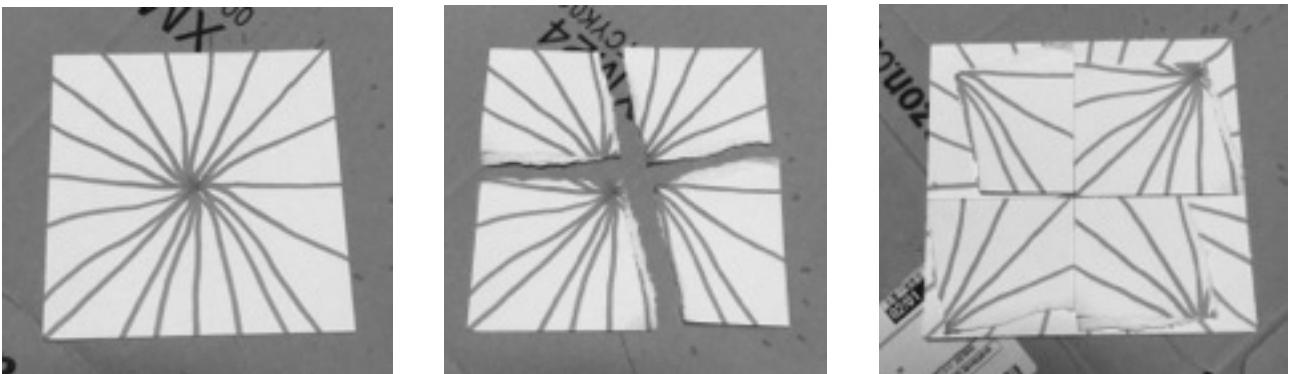


anti-index / media poiesis -損傷と再生

反-インデックスのために。示唆対象の現実に恣意的かつ政治的に紐づけされたイメージを批判し、自律的なイメージ生成の回路へとひらく。元画像のデータのみをつかって、新たな時空間を立ち上げて見せよう。これが作者の政治的スタンスである。本作で作者が独自に考案した画像生成システムは、元の矩形のイメージを分裂させ、再結合するプロセスを再帰的に実行することによって展開する。まず、画像を4つに分裂させる。このときそれぞれのピースは直角を保持する部分となるように。つぎに、分裂させた画像をオリジナルの配列とは異なる配置でピッタリと再結合させる。一見するとそんな配置など存在しないように思えるが、4つのピースをそれぞれ回転させると、直角部分を中心に集結させるようにして合致させることができる（！）。パズルのオルナタティヴな結合。この回転のヴァリエーションにはいくつもの選択肢があるので、配置をアレンジしよう。そうして生成した画像図形を、元画像の複製のうえに貼る。そのとき元画像の各辺に画像図形の各突端が接するよう、元画像コピーを拡大し、背景として再帰的に重ね合わせる。これを1サイクルとして、くり返し変換をかけてゆくのである。重ね合わせられた次世代の元画像は引き伸ばされるため、解像度は粗くなり、サイクルの世代階層ごとに解像度の落差を生じさせることになる。これによって、画像の”粗さ”をプロセスの時間発展のログとして内蔵してゆく「解像度遠近法」と呼べるような手法になる。



引き裂いたイメージを元とは別様の回路で結合させるプロセス。実際にこの手製のシステムをグラフィック上で実行すると、解像度の落差が時空間表現の新たな情報として活用できることがわかる。異なる解像度の画像を、何らかの規則性に基づいて配置することで、その質的差異を情報として生起させる造形法は、他にもさまざまに展開可能性があるだろう。

翻って、システムによって切り刻まれ-引き伸ばされ-貼り合わされたイメージを観ると、まるでネット上を駆け巡りながら現実を醸成するメディア情報の派生様態のようでもある。とくにイスラム国の画像は、それらがもつ示唆対象や意味内容（あるいは顔）を、本作の画像システムが分断し再風景化することによって、かえって別の事態を露わにしている。それは色やテクスチャといった抽象的なパターンが強固なアイコンを未だ留めているということだ。そのアイコンとは、おそらくネットに画像が流布することによって私たちとメディアとの間に生じた「状況のイマージュ」なのではないだろうか。